
CAR LOVE LETTER 「Jack-o'-lantern」

YAS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CAR LOVE LETTER 「Jack-o'-Lantern」

【Nコード】

N8235H

【作者名】

YAS

【あらすじ】

不景気のさなかお客を求めて走るタクシー。まるでお化けカボチヤのランタンのようだ。（テーマ車種：トヨタクラウンコンフォート（TSS10））

(前書き)

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持つたことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

<Theme: TOYOTA CROWN COMFORT(TS
S10)>

国道沿いの歩道を歩く。

夏の終わりの夜風が、ほろ酔い気分丁度良い感じだ。

今日は会社の部下の送別会だった。

部下といっても彼は正社員ではなく、派遣社員として私の部署へ配属されてきた。

正社員と同じ、いや、それ以上にできるやつで、実際新人へ仕事を教えていたり、会議に使う資料なんかを作らせたら、期待以上の出来栄で驚いたりもしたもんだ。

そんな彼も、やはりこの不景気で仕事を追われる羽目になってしまった。

私も部下達も、彼をこのまま留まらせてもらえる様、正社員として雇用してもらえよう、何度も上へ掛け合ってみた。

しかし、現実とは本当に冷たいもので、会社はそんな私達の声を聞き入れてはくれなかった。

本当に私達に尽くしてくれた彼のためだ、せめて盛大に送り出してやろう、そう思っていたのだが、やはりここでも現実は厳しい。

残業規制、給与カット、そして一時金の大幅減額。私たちの生活にも、不景気は大きな影を落としている。

結局いつもの居酒屋の飲み放題コースをお願いするのが精一杯となつてしまった。

でも彼は、そんな事には文句も言わず、ホントにありがとう、あり

がとう、と涙を浮かべて仲間たちとの別れを惜んでいるようだった。

「次の仕事は、決まりそうかね。」不躰な質問だが、私は彼のこれからが気になって気になって仕方が無かった。

「・・・まあ、何とかなるでしょう。いや、何とかしなくちゃ、ですぬ。」少し力の無い笑顔で、彼はそう答えた。

無理も無い。この間二人目の子供が生まれただけだと聞いた。そんな状況で仕事を失う不安を思ったら・・・。

私は、彼の力になってやれなかった事が、本当に悔やまれてならなかった。

宴会の2時間はあっという間に過ぎ、彼らは二次会のカラオケに行くようだ。

私はカラオケが苦手なので、幹事の若いのに少しばかり握らせて、これで帰ることにした。

「お世話になりました。」派遣の彼が私に歩み寄る。

「頑張れ。」私はそれだけ言い、彼と握手した。

細身の体からは考えられない位のしっかりとした握力で、彼は私の手を握り返してきた。

その握手を通じて、きっと彼は大丈夫だと、私は裏付けの無い安堵を感じた。

本当に、不思議なやつだ。

週末の国道の流れは速い。

でもそのなかで、行灯の付いたタクシーだけは左車線を少々ゆつくり流している。お客を求めて走っている証拠だ。

酔いの回った私には、そのゆるゆるとした行灯の光が、まるで八口ワインのお化けカボチャのランタンのように見えた。

このまま歩いて帰るにはちょっと距離が長すぎる。財布の中身が心もとないが・・・、乗ってしまうか。

私が左手を挙げると、すぐさまお化けカボチャはハザードランプを点灯し、路肩に止まった。

「いらつしゃいませ。ご利用ありがとうございます。」

意外に若い運転手さん。だけれども礼儀正しいこの一言。

ちよつと距離はあるけれど、家の近くまで行ってもらつことにした。お化けカボチャのクラウンコンフォートは、するすると国道の流れに合流する。

「最近のタクシーはオートマなんだね。時代は変わるもんだ。一昔前じゃ手漕ぎのセドリックなんて走ってたのにね。」久しぶりに乗るタクシーに、私は興味津々だった。

「お客さん、目の前の電光掲示板でニュースも読んでいただけますよ。」

新幹線の電光掲示板と同じように、私の目の前には夕刊のニュースがチカチカと流れていた。

すごいなあ。タクシーは単なる移動手段だけでなく持っているんだなあ。

「しかもカーナビまで付いているんだ。」恥ずかしながら、私の車には未だにカーナビはついていない。

「昔だったら、お客さんが寝てしまつと、どう行つたらいいのか、分からなくなつちやつたらしいですけれどね。」若い運転手さんらしい答えだ。

そんなやり取りを運転手さんと交わしながら、クラウンコンフォートは私の家路をひた走る。

この車、5ナンバーだが狭さは感じない。タクシー用として作られた、なかなかの傑作車だ。

運転手さんの間でも、クラウンコンフォートは評判が良いらしい。乗りやすく、疲れにくく、燃費もいいと。

確かに、昔のタクシーはいかにも商用車という乗り心地だったが、これは商用車というより、普通の乗用車と変わらない乗り心地だ。でも、この車内の匂いは、やっぱりタクシーだなあと感じる匂いだった。

自宅から少し離れた交差点で、運転手さんは突然メーターを止めた。あれ、家はもうちょっと先だよ。

「この不況下でこんな距離ご利用していただいて有難いと思いつて・・・私からのココロばかりのサービスです。」

こんな若者、こんなタクシー運転手がまだ日本に居るんだ。運転手さんのココロばかりのサービスに、私はココロ打たれてしまった。

彼の好意に甘えて、結局家の前まで送ってもらってしまった。

「本日はご利用ありがとうございました。」とまた礼儀正しく彼は言う。

「どうもありがとう。夜も遅くまでお疲れさん。気をつけて走つてよね。」

私は150円のお釣りを受け取らず、彼のクラウンコンフォートを見送った。

真っ黒なクラウンコンフォートはすすると国道の流れに合流し、
夜の闇に溶けていった。

お化けカボチャのランタンを、ぼんやりと輝かせながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8235h/>

CAR LOVE LETTER 「Jack-o'-lantern」

2010年10月14日04時22分発行